

大 雪 原

大雪原

1956年4月30日 第1版刊行

著者 瓜 生 卓 造
うり う たく ぞう

刊行者 竹内 富子

定 価 250円
地方価 260円

株式 三 笠 書 房
會社

東京都千代田區神田神保町二丁目
6504
電話九段區 7483 振替東京 22096

Printed in Japan

鈴屋 印刷 ・ 岸田 製本

大 雪 原

瓜 生 卓 造



三 笠 書 房

序

丹羽文雄

芥川賞の候補にもなり、直木賞の候補にもなる瓜生卓造君の文学は、その事実が巧みに彼の文学の特色を云ひあらはしてゐる。つまり幅が広いのだ。彼の文学の歩み方をながめてゐると、私には大変興味がある。彼と知合ひになつたのは、すでに十年に近い昔である。いまは故人となつた牧野武之助の紹介状をもつて初めて瓜生君が私の書齋にあらはれた。膨大な量の原稿を持参した。当時の彼は、ひどく観念的な小説を書いてゐた。正直なところ私は、首をひねらざるを得なかつた。当時の彼は自分の本質を掴むのに暗中摸索時代であつたらしい。その後しばらく筆を措いてゐたやうである。

「文学者」が創刊されると、同人の一人となつた彼は俄然己の本質をさぐりあてたやうであつた。書くものが急変した。私はおどろいた。牧野信一の好きな彼には、多分に自虐精神があつた。そのため特に牧野信一の文学に近親感を抱いたのかも知れないのだが、私の見るところ

では、同じやうな自虐精神にしても、その生じる場がちがつてゐたやうである。環境的に瓜生君は牧野信一よりはるかにめぐまれてゐることが、いつまでも牧野信一の境地に安住させておかなかつたのだらう。瓜生君の自虐精神は、もつとちがふ場にあらはるべきものであつた。私は決定的なものの言ひ方をするが、目下の彼はその問題で悩んでゐるにちがひない。

「南緯八十度」「北極海流」になると、さらに彼は前進してゐる。前者は芥川賞の候補、後者は直木賞の候補になつた。彼は漸く本来の自分を擱んだやうである。観念的な昔の小説が、すべて反故にすぎなかつたといふことにはなるまい。具象的になつてきた彼の文学が、さらに大きくなるには、昔の観念性が大いに役立つにちがひないのである。

瓜生君の文学には、いはゆる文学青年的な青臭さがない。巧緻である。「金精峠」は新潮の新人号に出たものだが、その巧みな小説技術は群を抜いてゐた。——単に巧緻な小説を書く作家にかたまつてしまふには、どこか野生的なものも多分に持つてゐる瓜生卓造である。将来を期待出来る人である。私の若い友人の中では、もつとも瞩目されてゐる一人である。

昭和三十一年四月

目次

序

丹羽文雄 三

大雪原 七

南緯八十度 五

北極海流 二九

入江の灯 一五

金精峠 三二

解説

石川利光 三

装
幀

藤
岡
光
一

大雪原

船はきのう子午線をこえて、北半球に入つた。北緯四度附近であらうか。白瀬は、むれるような船室をのがれて、一人甲板にでた。

空はどこまでも青く澄んでいる。そよ風が肌に心地よく、南の陽光はひとときわ明るい。今日はスコールも望めそうにない。船は軽快なエンジンのひびきとともに熱帯の緑波をきつていた。

白瀬は日かげをもとめて、ともへ歩みながら、すぎさつた日々に想いを馳せた。そしてなにかしら忸怩たるものを覚えていた。彼はいま、陸軍中尉の礼服につつまれて、この日光丸の一等船客である。居心地のよいキャビン、上等な食事、豪華なサロン、彼をとりまくこれらの環境は、いつたいどうしたことであらうか。つい数カ月まえまで、わずか二〇四トンの木造船開南丸で、南極圏の氷海を縫航し、狂暴な吹雪に翻弄されながら、南極の雪原に櫓を曳いていたことなど、とおい昔のひとつのように思いかえされた。夢にみた探検はおわつた。そして、それはあまりにも貧弱ではなかつたか。凱旋と呼ぶのはおこがましい。が、ともかく彼は、成功した日本南極探検隊の隊長として安穩な帰国の途についている。そして、彼は、いまごろ南半球の怒濤のまにまに、開南丸とともに苦闘しているのであらう同僚たちの身のうえを思つた。おなじ帰国の航海にしても、その環境はあまりにもちがいがいすぎはしまいか。南極圏は云わずもがな、往路濠州までの航海も、けつしてらくなものではなかつた。盛大な見送りをうけて芝浦ロセッタ棧橋をはなれ、翌、明治四十三年十一月三十日、暴風雨の館山港をあとに、太平洋の荒波に

抛りだされてから、翌年二月八日ウエリントン入港まで、二カ月余の苦難の旅であつた。ことにその年の暮もおしつまつて、この赤道附近を通過したころは、慘憺たるものでさえあつた。熱帯の暑気に食糧飲料は腐敗し、犬はつぎつぎと弱り、下痢と吐瀉をかさねた。腐つた食物と、犬どもの排泄物の悪臭は、汗や油とまじりあつて、目もくらみそうな臭氣が、船内に充満していた。それに火薬類もつねに自然発火の危険にさらされていた。ことに飲料水の腐敗は悲惨なものだつた。飲料タンクは、腐敗をふせいで、内側が焼かれていたが、そのために水は黒くにごつてしまつた。それもひどく不足し、赤道をすぎるところには、一日コップ一杯の配給がやつたという状態となつた。船室内は、悪臭ばかりではなく、メチールアミンなどの有毒ガスが発生し、一同は頭痛、眩暈等の不快な症状になやまされた。やむなく、彼等は甲板で飲食し、短艇のかげにもぐりこんで寝ては、ほとんど甲板生活となつたが、スコールのたびごとに火事場のような騒ぎであつた。ひどい嵐におそわれ、船体は三十五度もかたむき、船員までが船暈になやまされるかと思うと、風はまつたく死にたえて、氣の狂いそうな暑氣が襲來した。風位もつねに不安定で帆走はくるしく、汽走を余儀なくされても、燃料は極度に節約しなければならず、また長い汽走ののちには、汽罐はすぐに故障をおこした。あるときには、嵐をさけて逆航したし、またあるときは無風状態に、汽罐は故障し、青畳のような海を潮流にまかせてたどつた。船員たちの労苦はひととおりではなかつた。暑氣と悪臭の充満した汽罐室での作業は、言語にぜつする苦痛であつたし、嵐には嵐、風には風で、帆の操縦は彼等に一刻の猶予も与え

なかつた。隊員のあるものは、浴衣一枚の着ながしで、甲板にねそべり、これらを傍見するものもあつて、船員とのあいだに、しばしば小ぜりあいがおこつた。各自の分にしたがつた理窟はあろうし、長い航海の無聊もあつたろうが、彼等はたしかに団体訓練にかけていた。こんな航海も、年が改まり、南回帰線を越えるころになると、気温もしだいに降下し、しのぎよい氣候となつた。しかし、風位はあいかわらず不安定で、飲食物はますます腐敗し、また、それまでに五、六頭の犬は海水に葬られてしまつた。船の外板水平面には、夥しい水垢、海草、貝類までが附着し、銅鉄板は赤く錆び、留釘の箇所は腐蝕し、分離の危険にさらされていた。しかしそれを修繕することもできず、船長は薄氷をふむ航海を強行しなければならなかつた。——そして開南丸はいまそのあたりを航海中であらうか。隊員たちは南極の氷雪に痛めつけられて疲れ、船体は満身創痍の状態にある。帰路は当然往路にもましてきびしい航海であらう。しかも自分は——。

三月二十三日、ぶじ探検を了えた一同を載せた開南丸はウエリントンに投錨した。そして二十八日、白瀬は、武田学術部長、池田同部員、村松書記長、田泉カメラマン、それに病氣の安田木工を加えて、開南丸とわかれ、シドニー經由帰国の途にいたのであつた。むろん理由はあつたし、先行する彼の使命も大切だつた。白瀬はできるだけ早く帰国し、後援会を援助し、船員の給料を都合し、探検隊の負債を返済しなければならなかつた。また田泉の撮影した貴重なフィルムは、冷房装置のない開南丸で熱帯をこしていくことはむりに思われた。しかし彼はな

によりもこの探検隊の隊長である。上記の理由は、隊長が開南丸をはなねばならぬほど急を要し、かつまた重大なものであらうか。フィルムの持ちかえりと帰国後のすみやかな処置ならば、田泉と二人の学術班だけで充分すぎるほどである。船員の給与、探検隊の負債といったところで、彼がたとえ一ト月はやく帰国しても、どれほどのことができるであらうか。彼は政治的な手腕に乏しく、かつ金策に至つてはまつたく無能にもひとしい自分を知つていた。今度の資金獲得も、知名人士の抱きこみも、彼はロボットの役目さえはたしえず、隊員のなかには、その方面にかけての有能の士はいくらもいるであらう。それならば彼はなぜ開南丸と別れたのであらうか。そのことに後めたさがつきまとう。あの原始人のような往路の航海の苦痛が、彼にこんどの安穩な帰国をうながしたのであらうか。すくなくともそう非難されたとき、彼に彼等を納得さすべき返答が用意されているであらうか。

そればかりか帰路の開南丸に沈没の危険がないと誰が保証できるであらうか。白瀬はなにやらたまらない気持におそわれた。彼はおびえたまなざしを四囲にくばつてから、ふたたびむしろいキャンピングへと入つていつた。

シャツまでぬぎすてて、ベッドによこたわりながら、白瀬の追想はなおもつづけられた。それにしてもあまりにも短い南への行程であつた。

白瀬以下七名の陸上隊が、鯨湾の水堤上に上陸したのは、一月十八日のことであつた。水堤のふちは欠け落ちるおそれがあると思われたので、彼等はそこから四キロ南進した氷原に基地

をさだめた。南緯七十八度三十三分、西經百六十度四十分。翌日、天幕に目ざめた彼等は基地小屋の建設にとりかかった。白瀬以下五名の隊員は、まず雪をふみかため、スコップをもつて縦横三間、深さ四尺の雪溝をほり、中央には頑丈な木の柱を雪中ふかくたてた。柱の先からは竹の支柱を四方にひろげ、そのうえから天幕をかけた。入口は北向きとし、中央通路をはさんで、左右に三枚、四枚とゴザがしかれ、寢床にあてられた。天幕の裾は、雪塊を一尺もの厚さにのせて、烈風にそなえた。気温は予想外にあたたかく、零下五度程度であり、彼等は防寒服をぬぎすて、スエーター一枚でもなお汗をかきながら作業をつづけた。その間に、山辺、花守の二人のアイヌは、犬橇を駆つて、氷堤上の荷物の運搬に往復し、正午、小屋の竣工するころには、荷物もすつかりはこびこまれた。午後はそのなかで、明日からの南進の準備がととのえられた。残留の吉野、村松の二名と、南進の白瀬以下、武田、三井所、山辺、花守の五名との、一切の食糧・装具の類がわけられた。南進隊は五名、三十六犬、二十日分と予定され、一つ一つが丹念に秤にかけられた。被服四十三貫、食糧、主食のビスケット、堅パン二十八貫、副食物三十七貫、犬の食糧四十貫、石油五貫、學術観測器具、天幕、医薬、諸雜貨等四十七貫、計二百貫を二つの橇に等分にふりわけねばならなかつた。そこに問題があつた。山辺、花守両アイヌは犬掛として当然橇に乗り、兩人の目方も二十一貫と同じだから問題なかつたが、残る白瀬、武田、三井所のわりふりである。彼等は相当大柄な上に、防寒具をきこんでいるため、いずれも二十貫前後である。この六十貫は、三十貫ずつ分載することはできない。そこで、犬を十五

頭と十三頭にわけ、十五頭の櫓は花守が曳き、これに白瀬と武田が乗り、十三頭の櫓は山辺が馱し、三井所がのる。つまり隊員一人の体重が、輓犬二匹の牽引力の差と認められた。

翌二十日も、よく晴れた。朝食後ただちに出發するつもりであつたが、實際の積荷にあたつて、予想外にてまがかかつた。氣温も零下十五度にさがつていた。二人のアイヌも初めてのことであり、手袋のままの仕事はなかなか捗らず、やつと彼等が出發できたのは正午も過ぎてからであつた。櫓は第一歩から難渋した。雪原は予想外にやわらかく、重い櫓は、一尺もわだちをもぐらせた。それでも、白瀬たちの前櫓はどうにかすすんだが、後櫓は山辺が嚴寒に汗を滲ませながら、「トウトウ、カイカイ」と必死に鞭をならすが、すこしも動こうとしない。それではと吉野、村松の残留組二名が、力一杯あとを押して五、六町すすんだが、その間に櫓は二回も転覆する始末である。精密に計算したつもりだつたが、生きものは計算どおりにはいかかつた。白瀬は初手からのこの誤算にくさりきり、前途が思いやられた。協議のすえ、犬の食糧の干鰯一俵と隊員五日分の副食物、計十二貫を削減してどうにか櫓をすすめることができた。三時間もすすんだころ、東南方約五〇〇米ほどに一つの小高い丘を認めた。その下にいつて幕営することにきめ、櫓を駆つたが、いけどもいけども距離はせばまらない。一面白一色のうえ、空氣の透明度が非常にたかいため、人は南極ではしばしば視界の標準をうしなつてしまふ。白瀬たちも、はじめてその小丘が、遙かに遠距離なのに氣づいて、到達をあきらめて天幕をはつた。翌日もいぜん櫓の進行は、思わしくなかつた。雪は泥濘のようになり、やがて太陽

は鉛白色の雪におおわれて、雪片がまいはじめた。曇天の極地の景観はまことにものういものであつた。ここには一切の景色が存在しないのである。高低もなく、色もない。気が変になりそうな白一色である。そのなかに橈はますます難渋する。隊員交代で膝をも没する雪をかきわけながら、橈のあとを押した。犬は二日目でもう弱りはじめ、二頭は曳綱をはなれ、彼等の後をとぼとぼとついてきた。二日かかつて微南々東に、わずか二十五キロすすみ得たのみだつた。夜半から大吹雪となつた。朝になつてもなおふきつづけていたが、午前十時頃には次第に小ぶりとなり、雲間から陽さえもれはじめたので、勇躍出発した。しかし、ながい航海に弱つたためか、また曳荷が、過重なためか、橈はますますすまなくなつた。狭い船のなかでの生活になれた犬も人も、この南進のまえに、充分なトレーニングが必要だつたことに気づいたが、今更いかんともなしがたかつた。ここにいたつてはなお積荷の削減をおこなうがい途はなかつた。彼等は寝袋や防寒具を共同とすることとし、さらに主食、副食九日分、計四十数貫の荷を雪上におろし、目印に赤旗をたててすすんだ。橈が軽くなつたので、犬どもは元氣をとりもどし、はじめて快適に橈は走つた。わずか三時間に二十キロもすすみえた。しばらくいくと行手に小丘があらわれた。これは昨日とちがいほんの目と鼻のさきに見える。しかし、もう十時にもなつていたので、そこを露營の地ときめた。白瀬は、食後花守に、その小丘を探索してくるようにつけ、もし一時間ばかりいつて到達しなかつたら引きかえすようにいいふくめた。花守はすぐに空の犬橈を駆つてでかけたが、そこまでは実に十キロもあつた。夜半になつ